

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520058

研究課題名（和文） 新宗教教祖伝の成立と構造に関する比較研究

研究課題名（英文） COMPARATIVE STUDY ON THE FORMATION AND STRUCTURE OF FOUNDERS' BIOGRAPHIES OF NEW RELIGIONS IN JAPAN

研究代表者

宮本 要太郎 (MIYAMOTO YOTARO)

関西大学・文学部・准教授

研究者番号：10312779

研究成果の概要：

新宗教教団が成立する上で「教祖」の創出はしばしば決定的に重要であり、その契機の一つが教祖伝である。教祖は民衆に新しい宗教的世界を開示するが、それが可能なのは教祖を中心とする「記憶の共同体」が存続するからであり、その意味でも「集合的物語」としての教祖伝の意義は大きい。教祖伝において後継者がどのように描かれているかは、教祖伝に内在する政治的力学を解明する上で重要だが、教祖伝の内容とは別に、それ自体の執筆、編纂、ならびに刊行をめぐる経緯も、教団の政治性を克明に物語る。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,600,000	0	1,600,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	360,000	3,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教学、聖伝論、教祖研究

## 1. 研究開始当初の背景

聖人伝、聖者伝、祖師伝、教祖伝などは、世界中のさまざまな宗教において見出されるが、それらを包含する概念としての聖伝に対する比較宗教学的の研究は、ほとんど進んでいない。しかし、多くの宗教伝統において聖なる人間についてのイマジネーションを喚起し、信念を具象化し、実践を方向づけてきた聖伝についての研究は、宗教的人間像と宗教共同体両方の理解にとって不可欠である。

ある特定の間人を通して歴史に顕現する聖なるものを記述することが聖伝を特徴づけるのであり、したがって聖伝は、対象となる「個人」を歴史的存在者として描きながら、同時に、その「個人」を媒介としてあらわになる、超越的なもの、永遠なるものを表現している。その意味で、宗教的人物の生涯に対する関心は、その時間的・空間的限定を—すなわちその歴史的制約性を—超克しつつ、繰り返して新たな聖者のイメージを求め続け

てきたのであって、その歴史はそのまま聖伝の歴史でもある。これらの「聖なる人間」に関する記憶は、しばしば彼らに対する帰依者たちの救済論的切望によってそのつど再構成されていくのであり、それゆえに聖者たちの個々の「生」は、それぞれの社会的・文化的・歴史的特殊性に根ざしつつも、それらを超越していくことが可能になる。研究代表者は、『聖伝の構造に関する宗教学的的研究』（2003年）において、一連の聖徳太子伝を中心に、聖伝のこのような救済論的構造を論じたが、今回実施した研究は、その成果をさらに展開するものである。

他方、近年、宗教学に限らず、さまざまな方面で「物語」に対する関心が高まっている。聖伝は、それを聖伝として読み、聞く者にとって、日常のレベルで救済の可能性を保障する宗教的物語として位置づけることができる。物語られる聖なる人間の生き様は、生のヴィジョンを提供するとともに、聖伝を生きる者たちが個々の出来事を解釈する上での注釈書にもなる。新宗教の教祖伝の場合、しばしばそこには教祖だけでなく、その家族も描かれており、したがってそれらの聖伝は、家族の「モデル」を提供したり、家族的人間関係の指針を示したりする。その意味で、教祖伝は多くの聖伝の中でも特殊な構造を有しているといえよう。J. ヴァッハは、宗教集団を、血縁・地縁などの非宗教的共同体と重なる「合致的集団」と、特定の宗教的目的の共有に基づく「特殊的集団」とに区分しているが、教祖伝には、この両者がいかにして有機的に結びつくかを解明するための鍵が隠されている。この問題関心は、近代家族に内在する<宗教>性やいわゆる「カルト」の<家族>的構造などに対する関心とも連関しており、今後、多面的に発展させていくことを念頭においている。

## 2. 研究の目的

日本における新宗教に関する研究は、主宗教社会学の分野を中心に多くの試みがあり、それらは『新宗教研究調査ハンドブック』（雄山閣、1981年）や『新宗教事典』（弘文堂、1989年）などに結実している。その中心をなすものとして教祖研究があり、とりわけその特性をめぐって多角的に探究されてきている。ところが、その教祖研究においてもっとも重要な資料となる教祖伝についての体系的かつ総合的な研究は、まったくといっていいほどなされていなかった。

教祖自身の手による自伝に関する研究では、たとえば荒木美智雄の「教祖の『聖伝』と『自叙伝』」（『宗教の創造力』講談社、2001年、所収）が注目されるが、この研究は金光教の教祖金光大神を事例として宗教

的自叙伝の宗教学的意味を明らかにしようとしたものであり、また教祖伝よりもむしろ自伝に重点をおいていた。本研究は、教祖研究のみならず新宗教教団の研究においても重要な資料となる教祖伝に焦点を絞り、複数の教祖伝を比較することで新宗教教祖伝の成立過程や構造を明らかにしようとする試みのものであり、そこから得られる成果は、教祖のみならず、新しい宗教教団が誕生するダイナミクスの理解にも寄与するはずである。

かかる問題意識に沿って、本研究は、2006年度から2008年度にかけて、日本を中心に、いわゆる新宗教の各教団における教祖伝を蒐集し、それらの比較を通して、「教祖」という存在の成立の契機を通時的に明らかにするとともに、聖伝としての教祖伝がもつ宗教的構造を共時的に解明することを、主たる目的として実施された。

その際、特に、教祖と呼ばれるようになる人々と、その家族との関係に注目した。というのも、血縁的家族関係を否定したイエスや文字通り「出家」したゴータマなどと異なり、日本の新宗教の創始者たちは、しばしば家族との関係を保持したままで教祖となっていくのであり、このプロセスにおける教祖と家族との緊張関係とその宗教的昇華は、新宗教のみならず、日本における宗教共同体のあり様全体にかかわって、重要な示唆を与えるものであると考えられたからである。

他方、新宗教の教祖伝を総合的に視野に入れることで、これまでの教祖研究・新宗教研究がもつばら個別性を軸に展開してきた状況に新しい視点を導入するとともに、太子伝や往生伝、祖師伝など日本における聖伝の諸伝統との連続性と非連続性を明確にすることで、日本宗教史における聖伝という宗教的ジャンルの統合的理解にも寄与することをめざした。

## 3. 研究の方法

研究の初年度はまず、教祖伝が教団においてとくに重要な意味をもつと見られる諸新宗教教団を訪問し、教祖伝を中心にした教団活動の調査および資料の収集を実施した。実際に訪問した教団は、円応教、金光教、真如苑、生長の家、世界救世教、肥州高野山、中山身語正宗、善隣教、天理教、PL教団、立正佼成会、孝道教団、解脱会である。また、これ以外に、大本、黒住教、松緑神道大和山、天照皇大神宮教、霊友会などの資料を入手した。

平行して、仏伝やイエス伝など聖伝に関する研究文献を中心に国内外から広く資料を蒐集し、新宗教の教祖伝との比較を行った。また、収集された新宗教教祖伝の類型論的考察にも取り組んだ。

本研究の基本的な方法論的枠組みは、人類の宗教体験とその表現の宗教的意味をさまざまな宗教的データの統合的理解によって解明しようとする、宗教学のそれである。もちろん、新宗教の教祖伝は、宗教現象であると同時に、歴史的、社会的、心理的、文化的現象でもある（さらに付け加えるならば、政治的、経済的現象でもある）。したがって、教祖伝の意味を統合的に理解しようとする試みは、社会学をはじめ、心理学、歴史学、文学、さらに仏教学、キリスト教学、民俗学などの成果を可能な限り参照する。しかし、教祖伝の本質はあくまでもそれが宗教現象として扱われる限りにおいてもっとも鮮明になるのであって、その意味で教祖伝という現象は宗教現象以外のものに還元されてはならない。

教祖伝は教祖の伝記であるが、その対象である人物の聖性を前提としており、またしばしばその聖性の啓示として書かれるのであって、その限りにおいてそれは単なる伝記と異なり、聖なる伝記である。したがって教祖伝は一般に、「教祖」を歴史的的存在者として描きながら同時に、その「教祖」を媒介として歴史の中に顕現される超越的なもの、永遠なるものが表現され、また解釈される。そこには、教祖伝のみならず聖伝一般を特徴づける、「神話＝歴史的」(mytho-historical)な叙述のスタイルが見出される。

いずれの教祖伝も印象的なエピソードに満ちているが、それらの出来事のシンボリックな意味の理解は、それら全体を整合的かつ統合的に理解させる聖伝の構想力にかかっている。その全体的理解の枠組みを提供するのが、教祖の「人生」である。かかる見地からすれば、イエスやブッダや聖徳太子の生涯と並んで各教祖の生涯は、そこにおいて多くの宗教的象徴が有機的に結びついて一つの宗教的コスモスを形成する「範例」(パラダイム)であり、また「歴史的原型」(ヒストリカル・プロトタイプ)である。新宗教の教祖伝の研究がとくに意義深いのは、教祖の「人生」がこのような構想力を支えている一方で、教団の信仰的営みが教祖伝の制作を通じてそのような「教祖」を新たに生み出していくことである。その点で、教祖と教団は相互依存的である。教祖伝の研究はかかるダイナミズムを明らかにすることを目指している。

歴史的人物を神格化する傾向が伝統的に日本宗教に強く見られることは、堀一郎(人神信仰)や宮田登(生き神信仰および霊神信仰)、中村元(指導者崇拜)などによって指摘されてきたが、聖なる人間の神格化は日本に限らず多くの宗教伝統に共通の現象である。重要なのは、歴史的に限定された特定

の人物の「生」を通して社会全体、歴史全体、そして宇宙全体が聖化される宗教的構造の解明であり、教祖伝の分析はそのもっとも中心的かつ根源的な課題を構成する。

#### 4. 研究成果

教祖となる人々に一般的に見られるパターンでは、疾病や家族との葛藤など孤独な苦悩の中で宗教体験をし、それによって獲得したカリスマ性を発揮することによって、自らの使命を自覚し、人々の救済に専念するようになる。教祖から直接教えを受け救われた人々は、教祖を中心に信仰共同体を形成する。教祖の死によってその共同体は最大の危機に瀕するが、すぐに消滅してしまうわけではない。共同体が存続し続けるかどうかは、実は、教祖を直接知らない信仰の第二・第三世代に教祖への求心性をうまく継承できるかどうかにかかっている。そのために教団としての取り組みが不可欠となる。

その取り組みは、大きく二つの方向をとる。一つは、教祖の卓越性・超越性を強調することによって救済者としての教祖像を打ち出す「教祖の神格化」の方向であり、もう一つは、さまざまな不幸の中で救いの道を求め続けた求道者としての教祖像を描き出す「教祖の人間化」の方向である。神格化された教祖は崇拜の対象となり、人間化された教祖は救いの範例(モデル)となるが、新宗教教団はこの両者が矛盾なく共存する教祖像を生み出すことで信仰共同体としての存続を図ろうとする。そこにおいて教祖伝は決定的に重要な意味をもってくるのである。

かかる予備的考察から、研究の初年度は金光教を事例として、太平洋戦争終戦までの時期を中心に、その教祖伝群の歴史的背景を追うと同時に、個々の教祖伝の内容に反映された信仰の在り方について考察を加えた。

新しい宗教運動の創始者達の宗教的世界が広く民衆の支持を集めるのは、主に、彼ら/彼女らの、民衆の生活に即した平易な言葉による教説と、直接的な救済のわざによるものであるが、創始者達がこの世を去った後もその宗教運動が民衆によって担われ続けるためには、「教祖」の創出がしばしば決定的に重要となる。その契機の一つが教祖伝である。教祖は民衆に新しい宗教的世界を開示する一方で、それが可能であるのは民衆の間に教祖を中心とする「記憶の共同体」が存続する限りにおいてであると言える。その意味でも「集合的物語」としての教祖伝の意義は決して小さくない。

教祖の死によってもたらされる共同体の危機は、しばしば後継者の問題を惹起する。宗教的権威ないしカリスマの委譲の問題である。教祖伝において後継者がどのように描

かかれているかは、教祖伝に内在する政治的力学を解明する上で、興味深い問いである。また、教祖伝の内容とは別に、それ自体の執筆、編纂、ならびに刊行をめぐる経緯も、教団の政治性を克明に物語る。天理教や金光教など歴史上多くの教祖伝を有する教団においては、これらの教祖伝群の誕生のいきさつは、信仰のダイナミズムを考える上でも看過できない。

教祖が自らの宗教体験を理解するために自叙伝を書くとするれば、教祖伝はその理解を少しでも共有したいという志向性に導かれている。教祖の宗教体験は本人以外には理解不可能であるが、野家啓一の論理を借りれば、理解不可能なものも「人間の生活の中の特定の主題への連関」の中に置かれることで受容可能なものとなる。この「連関」を形作ることこそ物語の根源的機能であり、教祖伝が単なる教祖個人の物語でなく、そこに家族や直信を含め、さまざまな人物が描かれている物語であるからこそ、教祖の宗教的世界は民衆にとって受容可能なものへと転化する。その背後に超越論的なプロットを読み込むことを可能にするのが聖伝の宗教的構造である。

以上のような成果に加え、本研究の2年目には日本宗教学会において『民衆宗教』の最前線」というテーマでパネルを組んだが、そこでの議論は本科研にとって大いに刺激となり、その成果の一部は本科研報告書に盛り込まれた。そのときのパネラーで本科研研究協力者の永岡崇は、教団ないし信仰者の描く教祖像と、信仰をもたない研究者の描くそれとを、対比させつつ、その両者が、緊張を孕みつつも、教祖をめぐる「読みの共同体」として相互に影響を及ぼしあう過程を分析し、教祖像の構築における「協働」のダイナミズムの一端を明らかにしてみせた。同じく中西尋子は、日本ではもっぱら「カルト」視されることの多い統一教会を取り上げ、教祖文鮮明に関する伝記的物語が信仰の強化にいかん貢献しているかを分析した。また、同じく福嶋信吉は、教祖伝を含む聖伝というより広い地平に立って、天理教のある教会の創設者の伝記に着目し、その解釈を通して、教祖伝と教会創設者の伝記との間の相補的関係の重要性を示唆してくれた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

① 宮本要太郎、「教祖伝と民衆宗教」、『宗教研究』、第355号、145～146頁、2008年、査読無

② 宮本要太郎、「新宗教教祖伝の生成の一端をめぐって」、『関西大学 文学論集』、第56巻第4号、1頁～21頁、2007年、査読無

③ 宮本要太郎、「新宗教教祖伝の成立について」、『宗教研究』、第351号、383～384頁、2007年、査読無

[学会発表] (計 4件)

① 宮本要太郎、「Myth and History in Sacred Biography」、日本宗教研究フォーラム、2008年5月1日、ロンドン大学東洋アフリカ研究所 (SOAS) 日本研究センター

② 宮本要太郎、「教祖伝と民衆宗教」、日本宗教学会第66回学術大会、2007年9月16日、立正大学

③ 宮本要太郎、「教祖伝の誕生をめぐって」、筑波大学哲学・思想学会第27回大会、2006年10月21日、筑波大学

④ 宮本要太郎、「新宗教教祖伝の成立について」、日本宗教学会第65回学術大会、2006年9月18日、東北大学、(パネル『民衆宗教』の最前線 代表者)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

宮本 要太郎 (MIYAMOTO YOTARO)  
関西大学・文学部・准教授  
研究者番号：10312779

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者

### (4) 研究協力者

永岡 崇 (NAGAOKA TAKASHI)  
大阪大学・大学院文学研究科・特別研究員 (DC1)

中西 尋子 (NAKANISHI HIROKO)  
関西学院大学・非常勤講師

福嶋 信吉 (FUKUSHIMA SHINKICHI)  
昭和大・非常勤講師